

ショーペンハウアーの老人論

—ペシミストの楽天的考察—

日大生産工 ○三輪 信吾

1.

団塊の世代が定年を迎えている昨今、老人問題が盛んに議論されている。その多くは経済的、社会的観点からのものであり、議論は白熱化している。そして老人問題を考えてゆくと、ついには老いそのものの考察へと進まざるを得ない。

しかし老いについて語ることは、元来タブーだったのではなかろうか。『老い』(1970)を出版したボーヴォワールは「社会にとって、老いは言わば1つの恥部であり、それについて語ることは不謹慎なのである」と書いている。今日の日本で老いに対する議論が盛んなのは、高齢化率の高まりとは別に、経済的条件の好転に伴い、老いを全体としてネガティブにのみ見るのではなく、プラス面を評価する地盤が出来てきたことも寄与しているように思われる。

ところで、20世紀前半までは平均寿命も短く、まさに「人生七十古来稀」の世界であったから、今日のような老人全体を対象とした社会的レベルの議論は無きに等しいが、昔から老人あるいは老いについて語った人物は少なくない。ここでは、いささかシニカルではあるが、老年に積極的な評価を与えたショーペンハウアー(1788～1860)をとりあげたい。彼は自他共に認めるペシミストで、生涯独身の哲学者である。63歳で出版した『余録と補遺』(1851)に含まれる「年齢の差異について」において、楽天的老人論を展開した。

彼の老人論は、あくまで、自身の老いを哲学者の立場から深く掘り下げるところからきており、そこに普遍性を見出そうとしている。しかし、実際に見えてくるのは、ショーペンハウアーの人と哲学である。今日の老人問題への示唆を求めてアプローチしても無駄になるであろう。むしろ、各自の老いという、個人的なかかわりで見るときであって、そうすれば裨益するところも多いと思われる。ペシミストがなぜ楽天的だったのか、また、彼の老後は実際にどうだったのかを含めて以下に述べてゆきたい。

2.

ショーペンハウアーは「年齢の差異について」の中で人間の一生を4つの時期に分けている。それは少年期、青年期、壮年期、老年期で、それぞれの時期の特徴を要約すると次のようになる。少年期は、特権的、観照的、審美的で幸福が強烈であればあるだけ不幸も強く感ずる。青年期は生きることを渴望するために、かえって挫折することも多く不幸に陥る。また、性欲に悩まされる。壮年期についていえば、40歳を過ぎると憂鬱である。情念や野心を断念したわけではないが、行く手に死をみるからである。そして老衰に先立つ

Schopenhauer on the Elderly -Optimistic Contemplation by a Pessimist-

Shingo MIWA

老年期は最も幸福である。「最良の年」と呼ぶこともできる。ただし、それには2つの条件がある。それは健康と、弱まった体力をカバーする程度の金をもつことである。この2つが満たされれば生涯のうちで極めてしのぎやすい時期となる。まず、時間が速く過ぎ去るので退屈がない。また情念が沈黙して、血も冷却し、性本能から開放されて人は理性を取り戻す。そしてこの世はすべて空しいとの洞察を得るから精神的にも平静を保つ。壮年期には憂鬱の種となる死も理性と精神的平静の前では脅威にならない。

このように見てくると確かにショーペンハウアーは老年期を高く評価していることが分かるが、重要なことは、その考え方が彼の哲学体系と密接に結びついており、単に「年齢の差異について」のみに見られる孤立的、断片的なものではないということである。

彼の哲学の根本命題は主著のタイトルそのもので『意志と表象としての世界』である。「意志」は世界の本質、本体で盲目的に生きようとする。意志に支配されると、人間は常に欲望に悩まされて休まることがない。これに対して「表象」としての世界は、認識の世界であって知的でやすらかである。ショーペンハウアーの目的は意志の世界を捨てて表象の世界に入ることであるが、人間は生涯に二度、これを経験する。一度目は少年期で、まだ意志が十分に働かないためと、逆に直観力や認識力が高いためである。二度目は老年期で意志の力が弱まるために認識力が表面にでてくるのである。

3.

彼の哲学は「ペシミズム」の哲学といわれるが、ラテン語の語源が意味するところは「常に最悪のことを考えて行動する」イズムなのである。ペシミズムは日本語で厭世主義あるいは悲観主義と訳されるが、本来「最悪主義」と訳されるべきものである。波多野精一のように、この訳語を採用した学者もいたけれども、一般化するに至らなかった。その理由の1つとして考えられるのは、ペシミズムには確かに厭世主義の側面もあるからである。ショーペンハウアー自身は著作で自分をペシリストと書いたことはないが、ホルンシュタインとの対話の中で、バイロン、レオパルディそして彼自身を最も偉大なペシリストと呼んだことが記録されている。生涯と著作、とくに生涯から判断すると、ショーペンハウアーには「最悪主義者」が相応しいが、バイロン、レオパルディには向いていない。むしろ「厭世主義者」の方が当たっている。それで結局のところペシリストのままが無難ということにもなる。オプティミズムも同じく「最善主義」という意味であるが、こちらは「楽天主義」で問題ないように思われる。とくに形容詞形のオプティミスティックは長いので「楽天的」の方が具合がよい。

ところで「最悪主義」には用心深さや守りの姿勢が感じられる。これは老人に多くみられるものである。バイロンやレオパルディは、これらに欠けていたが、ショーペンハウアーは若い時から老人向きの行動原理を守っていたのである。これらの点からみると、ショーペンハウアー哲学は、元来、老人向きのもの、老人にこそ、よく理解されるものと思われる。彼の哲学はペシミズムという、若者を惹きつけやすい名称でよばれることがあるために、若者の哲学と考えられる場合が多いが、これは正しいとはいえないのである。彼は同じ「年齢の差異について」の中で次のようにも言っている。「若い人は直観がすぐれているから詩に適しており、老人は思考がすぐれているから哲学に向いている。若者には憂鬱

と悲哀があるが老人にはある種の朗らかさがある。若い人は不安だが老人は平穩。独自の認識は若い時に持たねばならないが、偉大な著述家の傑作は 50 歳頃から生まれる」。

いずれも老年期を褒めこそすれ、貶すものはない。そしてこれらの特徴づけも、彼自身の経験からきていることは彼の伝記を読めば容易に想像がつく。それでは老人には欲と呼ばれるものは無いのだろうか。そんなことはない。名誉欲 (Ruhmsucht) があるのだ。弟子のフラウエンシュテットが師の考えを伝えている。「名誉欲をショーペンハウアーは老年の根本特徴とみなした。老人たちに、すでに他のすべてが無くなっているとしても、彼らは、なお、この一つのもの、すなわち名誉欲をもっている」。しかしこの名誉欲も身を亡ぼすような危険なものではない。それは過去の「英雄的行為」や「かつての栄光」を語ることであり、どんな老人も、彼の生涯において、自慢できる「喜びの日」や「栄光の日」を持ったことがあるとショーペンハウアーは考えているからである。

とはいえ、たとえ健康であっても、老人は長生きをすればするほど、死に近づき、死の影が忍び寄ってくることは避けられない。この問題を抜きにして、老年を論じることではできないだろう。ショーペンハウアーの答えは Euthanasie である。これは辞書には安楽死とあるが、彼の意味するところは leichtes Sterben すなわち「苦痛のない楽な死」である。彼は次のように説明する。「高齢になるにつれて加速度的に全ての力が消滅してゆくことは、確かにたいへん悲しいことである。しかしそれは必然的なこと、いやそれどころか、ありがたいことである。というわけは、もしそうでないと、すでに準備作業をしている死が非常に辛いものになるだろう。だから非常に高齢に達することがもたらす最大の利益は Euthanasie すなわち、非常に軽い、病気が原因でない、痙攣をともしない、全くそれと感ぜられない死である」。これは多くの日本人が希望している「ポックリ逝く」というのに近いと思われる。実際にショーペンハウアー自身の願望でもあった。それでは、このような死に恵まれる人は何歳位の人であろうか。彼は 90 歳を超えた人だけだといっている。

死後の世界についてはどうであろうか。ショーペンハウアーは、個体の存続あるいは持続をきっぱり否定する。つまり個体は死ねば滅びるのである。このことからキリスト教は否定される。他方で彼は「われわれの真の本質は死んでも滅びない」と主張する。庶民感覚では、死んだら自分がどうなるかが最大の関心事である。いや、これは庶民に限ったことではないかもしれない。「真の本質は死んでも滅びない」といわれても、理解に苦しむのが普通である。すくなくとも、これで救われることはないだろう。ところで、これは汎神論ではない。汎神論はキリスト教を前提にしているという解釈のもとで、同じく否定されているのである。ショーペンハウアーは、この自分の哲学からの帰結に確信をもち、死に至るまで揺らぐことがなかった。すでに述べたように彼は自分に沈潜し、そこから一般論を導き出してくる。彼がこのように死及び死後の世界について信念をもち、それに安んじていたことも、彼の老人論に影響したことは疑いのないところである。

老人にとって死に劣らず脅威とされているのが孤独である。年をとればとるほど、当然ながら、先輩、同輩が他界してゆき、若い人からはボーヴォワールではないが、「1つの恥部」として目をそむけられる。だから孤独と死が結びついた孤独死ほど惨めなものはないと思われる。しかしショーペンハウアーにとっては、孤独は老年の特徴というより、

人間の中身の問題であって年齢は関係ないのである。「才知に富む人間(ein geistreicher Mensch)ならば、全く孤独になっても自分の持つ思想や想像によって結構なぐさめられるが、愚鈍な人間であってみれば、社交よ芝居よ遠足よ娯楽よと、いかに引切りなしに目先がかわっても、死ぬほどつらい退屈は、どうにも凌ぎがつかない」。このことから、彼は孤独を好み、自らによって慰められる人は「一財産持っているのと同じ」とみなしている。また彼は「人間の幸福にとっては、われわれのあり方(Was einer ist, What he or she is)、即ち人柄こそ、文句なしに第一の要件であり、最も本質的に重要なものである」といつているが、「才知に富む人間」とは、まさしく「われわれのあり方、即ち人柄」にかかわるので、努力してなれるものではない。健康や金を手に入れるのとは異なる。この、われわれのあり方の重要性を彼は英語の表現を引き合いに出して分かりやすく説明している。「英語で『楽しむ』ことを『自分を楽しむ (to enjoy one's self)』というのはきわめて適切な表現だ。例えば he enjoys himself at Paris. 『彼はパリで自分を楽しむ』といい『彼はパリを楽しむ』とはいわない」。

4.

晩年のショーペンハウアーは「常に最悪のことを考えて行動する」を実践した結果、健康と金を維持できていた。孤独は、若い時から友として、その効用を説いてきたので、苦にならないどころか、むしろ歓迎する状況にある。普通の人間であれば、老後はこの3点セットで事足りる。現代の老人問題は、まず健康と金、つぎが孤独対策といったところであろう。更に彼は、長年悩まされてきた性欲から解放され、死及び死後の世界についても自分なりの確固とした見解を持ち、微動だにせずという状態にある。加えて、長い不遇時代を経て、今や近著のおかげで主著を含めて彼の著作が読まれるようになってきた。更にいえば、妻子など係累がまったくないので後顧の憂えがない。このような人物、老人の中での例外中の例外が書く老人論が楽天的なのは当然である。最初に述べたように何ら老人問題解決のヒントにはならないかもしれない。しかし、われわれ個々人が老後を考える上で、それぞれの置かれた状況に応じて、彼の老人論から多くの示唆を得られるのではないだろうか。

最後に彼の死について簡単に述べておきたい。彼は Euthanasie (苦痛のない楽な死) を狙って 90 歳まで生きることを目指していたが、結果的には 1860 年に 72 歳で永眠した。80 歳のカント、83 歳のゲーテには遠く及ばないが、19 世紀に生きて古稀を越えたのだから長生きの部類にはいる。晩年のショーペンハウアーと身近に接したグヴィナーは、臨終について次のように書いている。「9 月 21 日の朝、彼はいつものように起床して冷水浴を試み、続いて朝食を取った。やがて来た家政婦がちょうど朝の空気を部屋に入れて立ち去ったばかりであったが、つづいてまもなく往診に訪れた医者が入室して、彼の死を発見した。彼はソファの隅で仰向けに寄りかかったまま死んでいた。肺卒中(Lungenschlag)が苦痛を与えぬままに彼をこの世から連れ去ったのである」。彼は 4 月頃から呼吸困難や動悸を経験し、9 月には肺炎で出血症状もみせていたが、死亡当日の記述からみれば、念願の Euthanasie で死を迎えたということも出来るだろう。

註：「年齢の差異について」の邦訳は、橋本文夫氏による名訳（新潮文庫）に依った。